



TITLE:

『困難な私たち』への遡行：接触領域における暴力の記憶の民族誌記述

AUTHOR(S):

中村, 平

CITATION:

中村, 平. 『困難な私たち』への遡行：接触領域における暴力の記憶の民族誌記述. コンタクト・ゾーン 2007, 1: 143-160

ISSUE DATE:

2007-03-31

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/177194>

RIGHT:

「困難な私たち」への遡行

——接触領域における暴力の記憶の民族誌記述

中村 平

1 はじめに

本稿は、接触領域における暴力の記憶の民族誌記述とその遂行するもの（記憶の分有の効果）を取り上げる。台湾先住民族、特にタイヤルと名づけられ名乗っている人々の間でフィールドワークをしてきた筆者は、彼らの植民地統治（被植民）の歴史と記憶をいかに考えるかという問いに取り組んできた。新聞に取り上げられるようないわゆる「大きな政治」においては、現在台湾先住民族の自治と脱植民化（decolonization）が議論されている。同時に「小さな政治」つまり日常においては、自分たちの過去についての断片的なさまざまな記憶が語られる。脱植民化に関して、大きな政治がともすれば民族主体を立ち上げる力のベクトルを有することに対し、小さな政治はそれを後押ししつつもずらすような力のベクトルを持っている。

断片的記憶はナショナルな力をずらし続けることにより、記憶を話し、聞き書き、読む者の間に、ナショナルでも基盤主義的でもない関係性を生み出す。植民地統治という接触領域における記憶に関する民族誌記述は、「困難な私たち」への遡行（後述）を行うことになるはずである。今記述し、今読まれるという、遂行的なプロセスにおいて、植民地統治に関する応答責任（responsibility）を取る（取り続けていく）「私たち」が、固定されない形で登場する。脱植民化はこの遂行的プロセスに設定されうる。本稿は台湾先住民族、特に筆者が聞き書きを行っているタイヤル民族の脱植民化を推し進める記述を、フィールドあるいは接触領域においての応答という形をとって考察するものである。まずこれらのキー概念を説明し、その後に台湾の状況に分け入っていきたい。暴力の記憶は読者と分有されることになる。

2 「困難な私たち」への^{そこう}遡行

2-1 「困難な私たち」

「困難な私たち」とは、「一切の根拠を拒否しながらも、遂行的に記述し続ける中でつむぎ出そうとする関係性」[富山 2002:311]を指す。ジュディス・バトラは、ジェンダーのアイデンティティは行為が営まれる中で（つまりパフォーマティブに）構築されると言

っている。

実体の形而上学の言説のなかでは、ジェンダーは結局、パフォーマティブなものである。つまり、そういう風に語られたアイデンティティを構築していくものである。この意味でジェンダーは常に「おこなうこと」であるが、しかしその行為は、行為の前に存在すると考えられる主体によっておこなわれるものではない。(中略)ジェンダーの表出の背後にジェンダー・アイデンティティは存在しない。アイデンティティは、その結果だと考えられる「表出」によって、まさにパフォーマティブに構築されるものである [バトラー 1999:58-9]。

ここでいうジェンダーの「表出」は、「表演」あるいは「表現」と言い換えてもよいだろう。このバトラーを受けて富山一郎は、行為者を確定することの不可能性を言う。「行為者に見えるものは、行為の後から構築された行為の起源であり、そうであるがゆえに、この起源である行為者は、行為により不断に攪乱されていくことになる」[富山 2000a:96]。この行為者は複数でもありうる。その主語である複数の行為者は、行為により不断に攪乱されていくことになる。私たちというアイデンティティはパフォーマティブに構築されるのであり、そのアイデンティティは行為を表す述語により不断に攪乱され続ける。

パフォーマティブに構築される「困難な私たち」は安易な結束や連帯ではなく、絶望を経由し使われる表現である [同上]。安易な結束や連帯ではない。しかし、つながりをあきらめているのでもない。起源を措定し神話を作り、人々を同質な存在に置き換えてつながるのではない形で人々がどうつながることができるのか、そこから生まれた考え方である。

田中雅一 [2002] はバトラーを受けて、主体ではなくエイジェントからなる「パフォーマティヴィティのコミュニティ」の研究を志向する。エイジェント概念が、がんじがらめの社会構造や規範下の練り人形として個人を描けばよいのか、自由で自立的に行為を決定する個人を描けばよいのかというアポリアの間を取り持つ。ジェンダー的な行為の反復がジェンダー化された自己を生み出すが、その反復が失敗することがある。その失敗は主体の挫折あるいは脱臼と呼べるものであり、既存の言説的秩序に裂け目を生み出す。ラカン派精神分析で言われるところの現実界が垣間見られる。ジェンダー化された行為の反復のようなパフォーマティヴィティを通じて生まれるのは安定した主体ではなく、「不安定でありながら同時に語りかける力を持つエージェンツ (行為主体)」[同上:349] である。エイジェントは「他者とのパフォーマティヴィティのネットワークを前提とし、それに影響を受けつつまた与えるという位置にあるもの」として想定される [同上:355]。アルチュセール以来の権力に従属する主体 (アイデンティティ) という想定は、新しい政治を打つ可能性を持つエイジェント (行為者) 概念に代わりつつある。田中の言う「パフォーマティヴィティのコミュニティ」が、富山の「困難な私たち」の言い換えであることが理解されるだろう。

上野千鶴子 [2005] は、言説行為の反復という過程を通じて事後的に構築されるアイデ

ンティティを行為に先立つ主体と設定するよりも、バトラーの言うようにエイジェンシー（行為体）と呼ぶことを提起している。言語がエイジェンシーを通じて語るプロセスそのものがエイジェンシーであり、あるいは「言語が主体を通じて語る」媒体がエイジェンシーである [同上：25]。同語反復のように見えるが、先験的に定義された主体が語り行為をするということではないということだ。

「困難な私たち」とは以上に見たエイジェンシーのことであり、絶望的に断絶・分断している植民者と被植民者のかすかなつながりの可能性はここに希求される。また民族誌記述自体がエイジェンシーであると見なせる。以下では、自分たちとは何者かという問い（遡行）が引き起こす、植民された暴力の経験や記憶の想起と「困難な私たち」が結びついていることを説明する。

2-2 遡行

非西洋人による西洋への（×）遡行、つまり自分とは何者かを考え続けるという遡行ということを、ここで、東アジアにおける「困難な私たち」に結びつけたい。なぜ「非西洋人による西洋への」という言い方にバツをつけるのかというと、この言い方は非西洋と西洋を対置させる二分法的思考に基づいた表現であるからだ。西洋の覇権的な言説を相手に、そこに分け入り、それらとまじりあい、それらを変容させ、これまで周辺に追いやられたり抑圧されたり忘れられたりした歴史を認めさせる営為を、エドワード・サイードは遡行（voyage in）と呼ぶ（邦訳では「遡航」としている）。ネイティビズムは起源を想定し、ナショナルで画一的な主体を外圧に対し立ち上げようとする考え方であるが、遡行はそれと一線を画す。

サイードは、トリニダード・トバゴ生まれの C. L. R. ジェイムズ（1901-1989）や、レバノン生まれのジョージ・アントニウス（1891-1942）といった植民地出身の知識人の仕事に注目する¹⁾。ジェイムズは言っている。「[非西洋か、西洋かという問いかけが：著者補足] あれかこれかというかたちで提出されるのを好みません。そうかんたんに割り切れないと思うからです。わたしはどちらもと考えています」（強調は原文 [サイード 2001：99-100]）。

ヨーロッパと西洋の言説を相手に、そこに分け入り、それらとまじりあい、それらを変容させ、これまで周辺に追いやられたり抑圧され忘れられた歴史を、西洋の言説界に認めさせる営為²⁾。それが遡行である [サイード 2001：46]。遡行は、周辺地域における反帝国主義抵抗運動と、欧米の内部における抵抗文化との間に、現在築き上げられつつある「文化的連合の基礎となるもの」を提供する [同上：120-1]。東アジアにおける帝国日本の内部の抵抗文化と旧植民地における反帝国主義抵抗運動の間のそのような連帯を、新しい「困難な私たち」に結びつけることを目指したい。

遡行は、日本とその（旧）植民地の関係、あるいは相互形成のあり方にあって看過し得ない重要性を持つだろう。さらに本稿は、サイードの注目するような知識人だけが遡行を行っているという訳ではなく、知識人と呼ばれていない人々にあってもそれに近い行為が植民的関係とその克服において行われてきたことに注目する。知識人と呼ばれない人々は

記述をし続ける中で思考を深めることは少ないかもしれないが、到来する記憶を生活のさまざまな場面で立ち止まって考え、口にすることは、遡行に限りなく近いと言えるのではなかろうか。

遡行は主体に作動する暴力と切り離せない。遡行は、絶えず解体し続ける主体の運動・プロセスである。現在もフランスの植民下にある小アンティル諸島出身のエドゥアール・グリッサン（1928—）は、歴史化されない植民地支配の痕跡³⁾——彼が「非-歴史」と呼ぶ領域に向かって、叙述をし続ける⁴⁾。グリッサンの言う「アンティル性」とは、叙述し続けるグリッサンが「知ることのできない存在」へ遡行し、自らを混乱させながら用い⁵⁾はじめる「我々の歴史」である。

植民地支配の痕跡とは、本研究においてはトラウマ経験とその記憶である。それは歴史化されない傷であり暴力の痕跡である。自分とは何か、我々とは何かという問いに答えはどのように与えられるかという、経験してきた過去の物語化が答えをほのめかすのであり、トラウマ経験はその重要な機制となる。トラウマ経験は、到来する記憶となってやってくる。遡行の中で行われる流用とは、自由な主体が道具を自由に使用するような戦略的なものであると同時に、模倣しなければならないという反復強迫的なものである〔富山 1996: 95〕。それは到来してしまう記憶においても同様である。強迫観念とは、過去のトラウマ経験に関する苦痛が、身体に転化されずに、別の観念に付着したものである〔大橋 1996: 125〕。遡行は、過去のトラウマ経験との向き合い、そしてその克服へ向けての言語化を含んでいる。

サイードの遡行とバトラーを受けた富山の「困難な私たち」は、私たちとは誰か、何かという台湾先住民族の自治をめぐる問い、そして植民されてきた過去の記憶の到来にあって、言葉を介して（叙述し続けるグリッサンに注意してほしい）結びつく。その記憶の分有が、タイヤルと日本の間に新たな私たちを、分有という行為の結果として生み出す。

岡真理〔2000〕は、人が主体的に支配し、想起することのできない暴力的、トラウマ的記憶と出来事を語るについて述べている。そうした記憶と出来事は人に到来するものであり、それを見聞きする（又聞きする）者は、無能さと受動性において記憶と出来事を受け取り、分有してしまう。「困難な私たち」への遡行とは、植民的状況における相互関係の記憶が想起される中で、自分たちとは何かという問いに答えを求め続ける、既存の主体を解体する暴力を内在する行為である。

3 接触領域に到来する記憶と応答責任

「困難な私たち」は、M. L. プラットの言う^{コンタクト・ゾーン}接触領域において出会い、また生成する。本稿が主張するのは、民族誌記述を通して読者が被植民の経験の記憶に出会う場もまた、接触領域であるということだ。プラットの提出した接触領域概念を、ここで振り返っておこう。

接触領域とは地理的・歴史的に断絶した複数の主体が、空間的・時間的に共にあることを指す。これら複数の主体がお互いの関係性の中で相互に構築される。植民者／被植民者の

関係は、「力の配分が極度に非対称的であるような関係」における同時存在や、相互にかみ合った自他の認識や実践的關係から考察される [Pratt 1992:6-7] (訳文は [チョウ 1999:353] を参考にした)。

地理的・歴史的に切り離された複数の主体が前提とされている点は考察を要するであろうが、非対称的な権力関係にある植民的状況の中で主体が形成されていくという視角は、本研究も受け継ぐものである。そしてその接触領域に、記憶の問題が接合されるべきである。

接触領域において到来する暴力の記憶は、記憶の強迫的な流用 (appropriation) と考えることが可能である。流用は接触領域で起きている。記憶の強迫的な流用あるいは記憶の専有 (到来) (appropriation) という事態は、接触領域で起きている。

戦争の記憶という問題、あるいは記憶という領域が提示するのは、それが語る者と聞く者、さらには記憶が書かれそれが読まれる者たちの間に、終わったこととして了解された鎮圧状態を喚起することである。それは、書かれ読まれるという場で織りなされる、進行中の出来事である。記憶が書かれ読まれること自体が、新しい政治であり、別の未来を再構成する契機である [富山 2005]。

タイヤルに対しての植民地統治は、武装した日本軍警によるタイヤルとの戦争と武装解除、それに続く占領という形で始まっている [中村 2003a]。日本人である私は、台湾先住民族、特に日本統治期に生まれた人たちにとり、植民された記憶を想起させてしまう媒体である [岡 2000を参照]。私という日本人を媒介として、暴力の記憶が、暴力的にタイヤルの人々に到来する事態を書き、それが読まれることが、タイヤルと日本がつながる可能性を開く。

本研究における接触領域概念は、出発点として三つの場面を想定している。まず、植民地統治下において、日本とタイヤルが出会い、お互いを日本／タイヤルと認識し、そうした存在として相互が形成される場面。次に、私がタイヤルの人たちと出会う場面。最後に、私が上の二つの場面を描き、それが今、読者に読まれているという場面。接触領域は、さしあたりこの三場面において登場する。こうした接触領域概念は、鷲田清一 [1999] が呼ぶ「臨床」場面での聴くこと・聴き取ることと共鳴する⁶⁾。

またフランツ・ファノン (1925-1961) は社会が開かれていく起点として臨床を捉え、新たな社会性を開く力を希求する可能性を、臨床を不断に外へ開き続けるものとしてその中で考え続けた [富山 1996]。日常に到来する暴力の記憶を聞き書きし、そうした民族誌記述が読者に読まれる場面において、つまり接触領域が出現する場面で、暴力の記憶は分有される。

本稿は、応答責任 (responsibility) は、ある者にとっての記憶の到来が、それを聞く者にいやおうなく分有され、そしてそれを民族誌として書き、読まれることの中で (つまり生成する接触領域の中で) 取られていくと主張する。応答責任あるいは応答可能性は、レスポンスビリティの訳語として導入された概念である。1990年代に日本がアジアの戦争被害者から直接に戦後補償を求められるようになり、戦争・戦後責任論争が強度を増して再燃した。応答責任とは、他者からの呼びかけや訴えがあったとき、その呼びかけに応え

るか応えないかの選択をせまられる磁場に置かれることを指す。「レスポンシブル」は、「応答をなしうる」と考えることが可能になる。他者からの呼びかけへの応答は、人間関係を作り出し、維持し、新たに作り直す行為であり、他者との基本的な信頼関係を確認する行為である [徐・高橋 2000:90-3]。

近年の責任をめぐる論議が過去における日本の戦争責任論と異なるのは、B. アンダーソン『想像の共同体』(1983年出版、邦訳は1987年)などに代表される、国民国家論あるいはナショナリズム批判を踏まえての責任論であるということだ。つまり、責任を取る際のナショナルな主体の立ち上げ方、あるいはそれをどう語りうるのかが問題となっている。

トーマス・キーナン [Keenan 1997] は倫理性と政治性についてこう述べている。倫理や政治は、主体やエイジェンシー、アイデンティティなどの概念の優越性に行為の基盤の根拠を求めようとするとき、逆に消滅してしまうものである。倫理や政治的経験は、こうした行為の基盤を取り除くことにおいてのみ出現する。私たちが何をすべきか知らずどうしたらいいかわからないとき、あるいは私たちの行為の影響や状況といったものがはっきりと計算できないとき、そして私たちがどこにも（自分自身にすら）振り返り立ち戻ることができないそのときに、レスポンシビリティのようなものに出会う。

キーナンの言う倫理性は、岡真理 [2000] が述べる、受動性において暴力の記憶と出来事を受け取ってしまう事態に近い。接触領域における暴力の記憶の民族誌はこうした事態に敏感であるだろう。また責任は倫理的道德的責任と政治的責任に切り分けられないだろう。責任を取りきることができないがゆえにその重さに耐えかね、政治的責任あるいは金銭的解決（補償）をもって問題が終わったとすることはできない。

応答責任の取り方には非言語的な行為も含まれるが、ここでは民族誌記述という言語行為における応答責任の可能性を日本と台湾・台湾先住民族のコンテキストにおいて追究する。以下、日本の台湾先住民族に対する植民地統治と、中華民国の台湾先住民族に対する政策、それらの中から生まれてきた自治をめぐる動きをみる。植民地統治の責任は議題にあがっている。多くの日本語読者にとり、こうしたコンテキストは必ずしも自明のものではないと思われる。

4 台湾先住民族における自治の課題

2007年現在、台湾（中華民国）自体の自治が問題になっているが、台湾の政府に13民族が公認されている、台湾先住民族⁷⁾の自治が同時に問題になっている。

1980年代の戒厳令の解除と、民主化運動を自ら推し進める中で、台湾先住民族は、中国語でいうところの「^{ユエンヂュミンズ}原住民族」のアイデンティティを、マジョリティ社会に承認させる運動を行ってきた。それは、この百年間の、近代国家の侵入による自治の阻害を取り戻そうという脱植民（化）(decolonization)の運動である。「脱植民（化）」(中国語では去殖^{チュヂー}民)は、現在、台湾先住民族の中で頻繁に使用されている言葉である [瓦歴斯・諾幹^{ワリス・ノカン} 1998]。

台湾先住民族である孫大川 [2000:141-55] は、集落意識から汎先住民族意識が形成さ

れた背景のひとつに、「私とは誰か」「私たちとは誰か」という自らに突き刺さる問いを問い続けた力を指摘している。「原住民族」の正式名称獲得運動では、自分たちの名を自分たちで決め、名乗るということが重要であった。

「原住民族委員会」の前専門委員であった以撒克・阿復^{イサク・アフ}は、台湾先住民族運動と自治について、こう述べている。先住民族の自治とは、脱植民のたたかいというコンテキストにおける、先住民族の自決権の、政治的な実践である〔以撒克・阿復 2005:1〕。先住民族に関する事柄の、全面的な自主的選択、自己管理、あるいは自己統治（self-governance）である〔同上：9〕。

植民主義（コロニアリズム）という概念は、軍事力あるいは暴力を背景に、他者を自己決定や自己発展の主体と見なさず、教導あるいは開発されるべき存在と見なして支配し、自己をその逆の存在、つまり理性的、文明的、生産的なものとして確立する傾向を指す。その支配は国家と資本の力の中にあり、自他の区別は、国家の制定する法により確定されていく。そうした植民主義にあらがう動きと、圧倒的な植民主義の磁場にありながらそれに対してさまざまな交渉を行う動きを、ここで脱植民化として想定している。

コロニアリズムの訳として「植民地主義」もある。本稿では中国語の「^{デミニンジューイ}殖民主義」という訳語を鑑み、またコロニアリズムを植民地のみの問題としてだけでなく植民側の問題でもあることを喚起する意味で、「植民主義」の訳語を採用する。そのことにより、植民側を射程に入れた「脱植民（化）」という言葉を使用することが可能となる。“Decolonization”を「脱植民地化」と訳すと、それが植民側の問題であることを字面の上で喚起する力に欠けるため、本稿では「脱植民（化）」としている。

台湾北部山地のタイヤルにおいては、植民主義が経済・政治的基盤の「発展」をもたらしたという言説⁹⁾は、その背後の国家暴力の考察の必要性和不可分の関係にある。タイヤルたちは、黙らされてきたのだ。¹⁰⁾

傅琪貽^{フチイ}〔2006〕は、霧社事件（1930年）、「旧慣打破」政策、「皇民化」と軍事動員における台湾先住民族の「主体的」な抵抗を記述し、植民地被支配の克服としての脱植民地化が課題だとしている。重要な論考であるが、本稿は、傅琪貽の重視する「植民地化とそれに対する抵抗」にとどまらない被植民／植民者間の微妙な感情的側面と、現在に到来する暴力の記憶を前景化し、「植民者日本人という主体」でないところ、つまり前述の「困難な私たち」に応答責任を遂行的に設定する試みを、より強く推し進める¹¹⁾。別の言葉で述べれば、武力抵抗にのみ台湾先住民族の主体性を見出してしまうのではなく、到来する暴力の記憶が今現在切り開く新しい政治に注目していく。武力抵抗しなかった先住民族の主体性は植民（地）統治に同化されてしまったとする歴史叙述が単純に過ぎることが、記憶が語られることを主題とする本稿から理解されるはずである。

さて2003年6月には、民族自治区の設立に関わる「原住民族自治区法」草案が、行政院から立法院に送られ審議されている。2005年1月には、「原住民族基本法」が立法化された（邦訳は〔石垣¹²⁾ 2005〕。先住民族の自治をめぐる論議は、中央、地方のさまざまなレベルで行われている。2000年以降首都台北において、「先住民族正式名称」（原住民族正名）シンポジウムや、「原住民重大歴史事件」学術シンポジウム、「台湾原住民族自治」学

術シンポジウム、「霧社事件七十周年」国際学術シンポジウムなどといったシンポジウムと、それに関連する著作の出版の動きが挙げられる。

タイヤル民族議会は、キリスト教長老教会が中心となり1998年に準備会を設立し、2000年に正式に成立を宣言した。その他の民族においては、タオが2002年11月、蘭嶼ヤミ（タオ）民族議会を成立。サイシヤット民族議会準備委員会は2005年8月25日、民族議会ならびに自治団体の設立を議論しており、新竹県においては2006年8月に県下の集落をまとめる「部落議会」を組織した。トゥルク（タロコとも表記する）は2005年10月、トゥルク民族自治推進委員会を成立。サオ民族議会は、2005年12月に成立。2006年6月14日、孔文吉立法委員が立法院にて「トゥルク自治法」草案に関する公聴会を開く。「トゥルク民族基本法」草案を起草。第3章にて、民族議会の規定がなされている。ツォウは2006年2月28日、ツォウ民族文化芸術基金主催により第8回「ツォウ是会議」を行い、「原住民ツォウ民族議会」の成立を決議している。プユマは2006年6月、プユマ民族第4回超集落会議を開き、プユマ民族議会について討議した。

民族議会の設立は、すべての先住各民族が同様に積極的に進めているわけではないが、^{ちんすいへん}陳水扁現総統の自治を保障するという公約を背景に、民族自治は先住民族運動における最新の大きなうねりとなっている。本稿では後で、あるタイヤル高齢女性の記憶を語るが、地方での動き、あるいはタイヤルとトゥルクに関連するシンポジウムとしては、以下の表のものが挙げられる（トゥルクはタイヤルから2003年に独立し、ひとつの民族となった）。

表1 タイヤルとトゥルク民族の自治に関するシンポジウムと著作

タイヤル（泰雅爾）民族議會	2005『 <i>Biru Bkgan na Tegbusal Mintxal Melahuy Qu Ginhoyal Pspung Zyuwaw Tayal</i> 泰雅爾民族議會第二屆第一次大會手冊』6月11日、於 Sinkina Tayal Kyokay（台灣基督長老教會五尖教會）、竹東
台灣原住民族學院促進會主催	2005『台灣・カナダ先住民族土地と自治に関する交流活動 スマクス集落工房』（台灣・加拿大原住民族土地與自治交流活動 司馬庫斯部落工作坊）1月19-20日、於桃園復興鄉スマクス集落
トゥルク民族（太魯閣族）自治推進委員会主催	2005「トゥルク民族自治議題」学術シンポジウム、11月26日、花蓮
台灣原住民族部落振興文教基金会主催	2002「タイヤル族エスニックグループ意識の構築とアイデンティティ、分裂」（泰雅族族群意識之建構，認同與分裂）学術シンポジウム、11月16-17日、台北
タイヤル（泰雅爾）民族議會	2000「タイヤル民族議会設立に関する簡単な説明：国際交流の激励」（泰雅爾民族議會緣起簡述：國際交流的激勵），「台灣原住民族國際交流合作會議」にて発表、12月
花蓮県先住民族の健康と文化研究会、慈済大学人類学研究所、財団法人国家文化芸術基金会、行政院原住民委員会、花蓮県政府原住民行政局主催	2000「民族古老の懐古——マサオ・モナ／廖守臣先生記念」（Sn-damat bi SkMasaw Mowna Mtgsa Tgrudan）学術シンポジウム、9月9-10日、花蓮
国立台湾博物館・中国民族学会主催	2000「エスニックグループ相互交流・タイヤル族文化変遷」（族群互動與泰雅族文化變遷）学術シンポジウム、7月28-30日、花蓮

こうした活発なシンポジウムがその議論の内容としているものは、歴史的な事件と、自治の問題、民族の歴史をどのように捉えるかという問題である。台湾先住民族の自治と歴史をめぐる動きは、自分のことを自分で決定するという、（民族的）自己決定権の希求として理解される。同時に、自己決定、自治を推し進める運動においては、自分たちとは何か、自分たちの歴史がどういうものなのかという問いが提出され、答えが求められている。

私（たち）とは何か、という廻行が行われているのである。

5 タイヤルの人々により、想起され語られる暴力の記憶

私はタイヤルの人々と出会う中で、どのような記憶と語り、あるいは直截に植民主義的な（コロニアルな）現実に出会ってきたのか。

台湾北部の山間部におけるタイヤルのエヘン集落とその周辺においては、以下のような語りや記憶に出会ってきた。1910年の日本軍警との戦い [中村 2003a]。戦士ハカオ・ヤユッツの戦死。伝統的政治リーダー「マラホー」の、官製「頭目」への換骨奪胎 [中村 2003b]。「日本の侵略」。武装解除。日本警察と「テイコクシュギ」の厳しさ。「蕃童教育所」での日本教育。日本が教えてくれた水田耕作。薬や教育をほどこし、道路をつくってくれた「天皇陛下」に対する「御恩」。日本のために南方に赴き戦った「高砂義勇隊」。米軍の空襲。日本人が「教えてくれた」歌 [中村 2003c]。

「大東亜戦争」の敗戦後の、中国国民党の統治。中国式の名前。日本時代「公医」となったタイヤルのエリート、ロシン・ワタンなどの銃殺 [中村 2006]、多くのタイヤルのエリートの入獄。中国共産党との、金門島などでの戦闘。「土地返還」を求めるデモ。「平地」での建設現場や工場の仕事。漢民族の差別的な眼差し。法に引っかかってしまう狩猟や魚とり。性産業への従事 [黄淑玲 2000を参照]。台風や災害と開発行為の関連。砂防ダムの環境破壊。

この暴力の記憶と呼びうるもの（しかし必ずしもそれにとどまらないもの）について、本稿では次節において、高地の集落で起こった日本統治終了間際の出来事とその記憶を取り上げる。

タイヤル民族議会の第二期会長である、マサ・トフイ氏は抑圧されてきた民族の歴史を語る。私は2004年から2005年にかけて、中華民国中央研究院民族学研究所で訪問研究員をしていた際に研究の報告を求められ、「桃園県を主としたタイヤル（民）族と植民主義、国家暴力」と題した報告を行った。漢民族が圧倒的な聴衆の中で、日本人である私は、大日本帝国と中華民国の二度にわたる植民政策においてタイヤルが暴力にさらされ、殺された人々がおり、中央と地方また宗派や各家庭のそれぞれに異なった状況の中で、自治の困難な課題を抱えていると中国語で報告した。

その質疑応答の中で、私の報告の半分近くの長い時間をかけ、タイヤル民族議会第二期会長であるユタス・マサ（マサ・トフイ氏）は中国語で、国家政策によりタイヤルの土地は奪われ、経済的な苦境にあること、タイヤルが昔から自分たちなりの政治制度、そして国土を持っていたことを訴えた。「ユタス」とは、タイヤル語で「おじいさん」という意味の尊称である。

ユタスはまた、「中台が緊張関係にある中で、アメリカ（米国）は、タイヤルが自治を主張することに対して、大きく文句はつけないはずだ」ということも私との会話の中で語っていた。ユタスは、台湾の少数民族が自治を主張することについて、中華人民共和国と台湾（中華民国）の緊張関係、それをとりまく日本、米国の国際関係まで思考せざるを得

ない。

高金素梅^{こうきん そばい}立法委員（タイヤル名 吉娃斯・阿麗^{チワス・アリ}）は、母方がタイヤル、父方が外省系の出身だが、近年先住民族の身分を取得し、日本と中華人民共和国を具体的射程に含めた政治活動を行っている。¹³⁾「日本帝国／植民主義」を批判するキャンペーンを張っている。

瓦歷斯・諾幹^{ワリス・ノカン}は台中県で小学校教師をしながら、タイヤル民族の歴史と文化に関する執筆と震災復興活動を行っている。被植民のきずあとを見すえつつ、民族の自立を模索している。黒帶・巴彥^{ヘイタイ・バヤン}は「故郷研究工作室」を立ち上げ、フィールドワークをしながらタイヤル文化の再建に取り組む。麗依京・尤瑪^{レギン・ユマ}は、台湾原住民族部落連盟を新竹県で立ち上げ、研究と自治促進の運動を行っている。タイヤルの伝統的な機織を復興させ、活動する女性の方々をあちこちで目にする〔悠蘭・多又^{ユラン・ドユ} 2004〕。

女性に対する家庭内暴力は、フィールドワークにおいてもしばしば耳にするし、利格拉樂・阿鳩^{リカラ・アウー}〔1998〕により取り上げられてもきた。多くの女性にとり、自治とはまずもって、家庭内そして集落内での女性の自己決定、その意味での自治を指すと言える。

こうしたさまざまな動きがタイヤルにおいて、必ずしも直接手を取り合うのではない背中合わせの形で存在している。私は、このようなタイヤルの自治をめぐる困難な状況にあって、国家統治経験の聞き書きを行ってきたのだが、私が日本人であること、そしてそのような私の登場はタイヤルの人々に日本の植民地統治経験を喚起させ、さまざまな感情や記憶を引き起こしてしまう〔中村 2003c〕。

自らの立場性に注意しながら、接触領域において生起するこうした事態を書くということとは、どういうことなのか。こうした事態を書くこととは、到来する植民経験の過去についての記憶の分有〔岡 2000〕を意識し、またタイヤルと日本の、さらにその周囲の人々をつなぐ「困難な私たち」への遡行となる。私自らが記述に織り込まれるということは、自称する者として歴史や文化を私が語ることである。記述が自己言及的になり、その中で「私たち」が生成し続ける。さらに読者に分有された記憶が、定義され確固とした基盤を持たない「私たち」をその都度生む。民族誌の記述が読者に読まれる中で、「私たち」はその都度新しく織り直されていくことになる。

6 ヤキ・ピスイが私に語る記憶

この章では、2005年5月に、台湾の桃園県復興郷エヘン集落で聞いた話を紹介する。このような話をいかに聞くのかが、最重要の問題として浮かび上がる。日本人がタイヤルに話を聞くという構図はよく見られるが、それにとどまらない関係性が同時に発生しているはずであり、そのようなものとして接触領域概念を捉え直すことができる。

私は2004年の10月末に、約1年の長期滞在の目的で台湾を再訪した。12月から、台湾の首都台北と桃園県復興郷にあるエヘン集落を往復していた。エヘン集落は、30戸ほど、人口400人くらいの集落。首都台北からは、車を飛ばしたら3時間程度。公共の交通機関では、乗り換え2回を経て、半日の行程である。台風後は、道が土砂崩れによりしばしば分断される。

エヘン集落の周辺は、タイヤル語で「ゴーガン」と伝統的に呼ばれる地域である。行政的には、桃園県復興郷の三光村にある。日本時代末期には、新竹州大溪郡に区分されていた。「ゴーガン」は日本語で「ガオガン」とされ、エヘン集落一帯を、植民地政府は「ガオガン蕃」と呼んだ。1945年8月の日本敗戦の後、台湾は中華民国に接収され、地名も人名も中国式のものに變更させられた。

郷の名称である「復興」は、^{フーシン}中華民国が中国全土を回復するための、「復興」の地・台湾という由来を持ち、台湾鉄道の列車「復興号」の名前などに使われ、台湾のあちこちで目にする名前である。

ヤキ・ピスイ（Yaki Pisui）とユタス・ユミン（Yutas Yumin）に、日本時代のことを聞きに行った（両方とも仮名）。ふたりとも70代半ばで、日本教育を受けた世代。私は台湾山地において、日本教育を受けた人たちの話の聞き書きを、1999年から行っている。私は父の勧めで大学卒業後台湾に渡り、台湾の大学院において日本統治時代についての修士論文を書いていた。初めてタイヤルの集落を訪れたのは、1996年のことで、父の紹介を受けてのことだった。父はその数年前より、台湾高地先住民族に関する歴史人類学的研究を始めており〔中村勝 2003〕、エヘン集落には、父の息子ということで赴いた。山の集落においては、「日本人が来た」とすぐに知れ渡る。日本語のできる高齢者を、すぐに紹介された。私は、聞き書きを容易に行うことのできる状況にあった。

「ヤキ」は「おばあさん」という意味である。ヤキ・ピスイは、数年前からひざを悪くして、毎日家のリビングルームのソファで、テレビを見ながら休んでいる。「ユタス」は「おじいさん」という意味で、ユタス・ユミンは、身体のあちこちに悪いところが出てきてはいるが、ゆっくり農作業ができるほどには元気である。

ヤキ、ユタスともに日本語が堪能で、それは1945年までの日本植民地時代に、学校教育や軍事動員において培われたものである。ヤキの出身は、山道を5キロほど離れたマリコワン集落（現新竹県尖石郷^{ぎょくほう}玉峰）で、エヘンに嫁いできた。ヤキの父親は、マリコワン集落で警察の下働き（警手）をしていた人物である。日本人との付き合いがよかったという。

ユタスに動員時のことを聞いているとき、ヤキは日本時代のこと、特に「大東亜戦争」終戦直前の日のことに話題を変えた。私とユタス、ヤキの会話は、ほとんどいつも日本語でしている。あるまとまりをもった話だなと私は察知し、ノートを取り始めた。

ヤキ・ピスイ：〔マリコワンの〕学校でね、朝会してたとき、何百台もの飛行機がならんで新竹の方に行ったよ。先生はずっと立って見てる。

ユタス・ユミン：あれはB29と言う。あのとき中^{ちゅう}〔壱^{れき}〕（桃園県平地の都市）に一週間、講習に行ってた。

ユタスはそのとき、バロン（現上巴陵）の監視所で毎日、米軍の飛行機を見ていたという。バロンはもともと、日本の軍警が、エヘン周辺のタイヤル集落を投降、帰順させるため、また「帰順」後の治安を維持するため、1910年に砲台を据えつけた場所である〔猪口

ヤキ：「(米軍の飛行機は) 高い山過ぎしたら (過ぎたら), パンパンとタマ落としている。それでも日本の先生はこわくないよ。ずーと, 百何名〔生徒が〕運動場で立ってる。そのときボークーゴー (防空壕) を掘っていた。でも深くないでしょ。撃たれたらダメよ。飛行機は飛行場を狙ってるから, 山には落とさなかったけど, 今考えたら危ないよ。〔日本人の〕コラテ (Korate) 先生, あの先生ダメよ。8月15日の夜はお盆祭。〔8月15日は実は日本が〕降服したでしょ。集まってお酒, 飲んでた。コラテ先生が〔突然〕鉄砲を撃ったよ。父さんの腕, 撃たれて, 別の人の腿にも当たった。何にもけんかもしてないのに, 〔コラテ先生は突然〕撃ったの。山地の人が集まって, 酒, 飲んでた。私の組の人たち。ひとりのおじいさんが怒って, やり返そうとしたけど, やめた。おじいさんの名前? シラン・シャツ (Silan Siac)。どうしてやめたかって? あのと, 自分の子が義勇隊〔高砂義勇隊〕に行って, 日本人が帰らさないかと思って, やめたの。その子の名前は, ヤブ・シラン (Yabu Silan)。しかしあとで, 子供も帰ってこなくて, やっておけばよかったと, 〔シランは〕部落の人に話したよ。

コラテ先生とは, おそらく日本名で「コダテ」である。タイヤル語にはdの音がないので, 近いrの音で代替しているようである。台湾先住民族に対する教育は, 「蕃童教育所」と呼ばれた学校において, 警察が教育を担当していた〔北村 2004〕。「子供も帰ってこなくて」というのは, 戦争で亡くなったことを指す。第二次世界大戦の台湾先住民族に対する軍事動員は, 1941年から特別志願兵, 高砂義勇隊として始まっていた。彼らは志願し, また志願しなければならない状況に追い込まれ, フィリピンやパプア・ニューギニアなどの「南方」戦線で, 日本のために戦う〔近藤 1996 : 387-97〕。「やっておけばよかった」という個所は, 「殺っておけば」と表記するべきだろうか。

ヤキ：「腿に当たった人は, ユミン・アタオ (Yumin Atao)。大溪^{たいけい}に運ばれて, 弾を取ったけど死んだ。私の父の名前はレサ・バトゥ (Lesa Batu)。みんなそのとき怒って, 日本人を帰らさないと言った。コラテ先生は, 大溪から警部が来て, 夜連れていった〔連れていかれた〕。〔警察たちは〕電燈を持ってきた。昔は夜歩くことは珍しかったの。コラテ先生は, 日本に帰らしていない〔帰っていない〕。銃殺されたい。九州の人だったわね。私の先生, 日本の警察よ。それでも撃った。

大溪は, エヘンからずっと山道を下って着く, 現桃園県平地の人口8万人ほどの都市。ユミン・アタオの孫は, 今でも玉峰に住んでいるという。ユミン・アタオの子供は, ヤキ・ピスイの同級生。おそらくコラテ先生は, 敗戦の混乱の中, 日本警察により処刑されたのであろう。

ヤキ：〔事件の次の日〕戦争終わったでしょ。日本は負けた。父さんは剣道とてもうまい。そのために、コラテ先生が具合悪く思ったかもしれない。あのとき、運動会は何でも競争する。おどり、走り……。剣道するとき、〔父は〕マリコワンの代表になって勝った。カウイラン社〔Kawilan, 現桃園県復興郷高義〕の人が負けた。お盆祭のとき、マリコワン社の人、みんな集まって、かんづめとかお菓子を食べてる。私はうちにいたの。お父さんは左腕、やられた。大きく怪我した。

お父さんは、大溪で治療を受けたという。

ヤキ：私が大溪に行って、お父さんを守った。14歳だった。私のお父さん、〔警察に〕何回も呼ばれた。でも行かないでしょ。こわいでしょ。私の親類のひとみんな分かってる。〔コラテ先生の行為は〕何のための原因か分からない。お父さんの兄さん、「何か、どうして撃つか」と、弓持って行って撃つよと言って、行った。シラン（・シャッ）だけが止めた。〔事件の日の夜〕派出所にはひとつのろうそくが、窓に入れてる〔映っていた〕。

ヤキ：翌日朝、〔日本人は〕もうおらん。^{かつばん}角板^{さん}（山）（現復興郷復興）から〔警察が〕来たかも、何十名来た。皆朝までいた。〔朝には〕日本の警察ひとりもおらん。山地の人短気でしょ。〔戦争は〕その日かその翌日か、降服したでしょ。その前に〔日本が降服すると〕分かっていたら、必ず死なしたはず。私〔看病のために〕何ヶ月くらいおったかね、大溪に。日本のお医者さん、台北の帝大病院が疎開して来ていた。中国人がお父さんに〔詳細を〕尋ねる。こわいよ。行かないよ。

終戦の前日あたり、50年間に及んだ、日本の植民地統治が終わろうとしたその間に、日本人警察「コラテ」先生に撃たれて、殺されたタイヤル人、ユミン・アタオ。同じく撃たれ、大怪我をさせられた、ヤキの父レサ・バトゥ。そして、そのことをヤキが私に日本語で語ってくれる。

ヤキ・ピスイはこの記憶を、なぜ私に語るのだろうか？私が歴史を研究する日本人の学徒だから？未来に向けての、日本とタイヤルの歴史の共有と和解のために？日本人に出会って、日本語を用いて話をする際、植民（地）の過去が反復強迫的にタイヤルとヤキを襲うから？そのどれもが正しく、どれもがすべてを語りきっていない。

この記憶、この歴史は、第4章で見たタイヤルや他の先住民族の知識人や政治家が、現在取り組んでいる自治や脱植民化の動きあるいは「私たちの歴史」の語り直しの、そばにある。抵抗の民族主体を立ち上げる際に、タイヤルの起源を措定し、ナショナルな主体形成の力のベクトルが働いていることは否定できない。その民族主体の歴史は、上のような断片的な記憶が話されることにおいて、強化もされるし、^{ナショナル}ずらされもする。ヤキ・ピスイの話は「日本帝国主義・植民主義粉碎！」という大きな（民族）^{ポリティックス}政治でのスローガンとは語り口が違う。だからこそこの話を聞いた、植民者の末裔である日本人は、複雑な思

いを抱くことになるだろう。その記憶を図らずも受け取ってしまうだろう。日本人にとっての他者の記憶が今まさに読まれること、それは他者の記憶の記述を通して他者と出会ってしまうという意味で、接触領域にあることに他ならない。民族誌記述が読まれることが、接触領域を生みなおしている。

接触領域における暴力の記憶の分有は、タイヤル／日本という二主体やふたつの個の間になされるのではなく、記憶のこの分有により、その二分法を越えたもの、つまり「困難な私たち」が生まれている。第2章で見たように、遡行は既存の主体を脅かす暴力を内包する。記憶の到来、特に暴力の記憶の到来は、人を専有する暴力である。本節のヤキ・ピスイの記憶の話を聞いてしまったからには、この話が心の片隅のどこかに刻まれてしまうことも確かである。そして記憶の分有は、脱植民運動の始まりの契機である。

ヤキ・ピスイはこの記憶を、タイヤルとして、日本人としての私に語ってくれたのか？ そうとも言えるし、タイヤル／日本という二主体の関係だけにこの話が回収される訳でもない。ヤキと私が、それまでになしてきた関係は、のっぺらぼうなタイヤルと日本の両者が出会うという関係にとどまらないものだからである。

この話は書かれ読まれることによって、読者のあなたに今送り届けられる。私は今この場で民族誌記述を通して語ることによって、私が聞いて体験したものをあなたに伝えたいと思う。植民地統治の責任を取るということを、暴力の記憶を聞きそれを語り直すという応答可能性の追求から、関係を作り直していく始まりの現象として考えていけるはずである。

7 民族誌の記述が、暴力の記憶の分有を通して「困難な私たち」への遡行を行う

台湾先住民族に対する日本と中華民国のふたつの国家統治に関する暴力の記憶は、自治をめぐる運動のそばにある。先住民族とは何か、私たちとは誰かという問いに答え続けることは、「困難な私たち」への遡行である。そうした遡行を記述することは、接触領域における、接触領域の記憶の民族誌記述である。日本人である私が日本植民主義に関する民族誌記述を行うこと自体が、日本人とは何者か、私とは何かということへ向かっての自己言及的な遡行であり、台湾先住民族と日本人をつなぐ可能性を開く新しい「困難な私たち」への遡行である。

植民地統治責任を取ることで、応答可能性（responsibility）を探ることは、このような現場あるいは臨床と呼べるような現場・フィールドにおいて、遂行的に事件（出来事）として発生する。本研究は脱植民化を、つまり植民地統治に関する応答責任を、今記述し今読まれるという、遂行的なプロセスにおいて取っていくという点に設定する。「困難な私たち」への遡行に、読者をいざなう点に設定する。¹⁴⁾

このような民族誌の記述自身が、暴力の記憶の分有を通して「困難な私たち」へと遡行する。植民統治への応答責任は、行為が生み出すところの、主体の解体し続ける者たちが取り続けていく。責任は、ナショナルな主体が取りきれものではない。

※本稿は、平成16-18年度文部科学省科学研究費補助金（特別研究員奨励費）、中華民国中央研究院民族学研究所での訪問学員（2004年10月-2005年9月）による成果の一部である。

注

- 1) 彼らはヨーロッパ世界に内側から語りかけ、そして文化という土俵の上で、ヨーロッパ世界の権威に論争をいどみ異議を申し立てるべく、オールタナティブなヨーロッパ像を提出することになった。「〈ネグリチュード〉、黒人ナショナリズム、1960年代と1970年代のネイティビズム、これらの洗礼をたっぷりうけたのちにもなおジェイムズは、反逆的・反帝国主義的潮流（中略）に属していながら、同時に西洋の遺産を断固として支持しつづけた」[サイード 2001:99]。
- 2) この種の作業を、周辺地域で、数多くの学者や批評家や知識人たちが行ってきた。サイードは、ジェイムズとアントニウスの二人に加え、その下の世代のラナジット・グハ（ベンガルの政治経済学者）、S. H. アラタス（マレーシアのムスリムの歴史社会理論家）、さらにはサルマン・ラシュディを挙げている。
- 3) 歴史化とは、当時の出来事を当時の歴史的な文脈で理解することを指す [上野 1998:158]。植民地統治の影響は、トラウマ記憶のように、事後的に理解される可能性を持つ。さらに、植民地統治の影響を受けて自己形成してきた者たちとは何かということを思考する（遡行する）ことは、歴史化しきれない何かを継続して思考していくということである。
- 4) グリッサンは「知ることでできない存在」——「非-歴史」に向かって遡行をする。それは、海に放り投げ捨てられた奴隷——海底植物のような存在である [富山 1996:96-7]。
- 5) 言い換えれば、意味化を超えた「偶然的出来事」を契機として、編集し直ししながら展望される「我々」。流用やクレオールは、遡行の中で、つまり主体がたえず解体され続ける中から生起する運動に他ならない。遡行は暴力の作動と深く関わっている [富山 1996:98]。
- 6) 鷲田 [1999] において、上の三番目に挙げた、書いたものが読まれる場面において自分自身が受動的あるいはヴァルネラブル（被傷的）なものとして描き込まれてはいない感はある。
- 7) 「台湾先住民族」という名称をここで使用することにより、「中国（あるいは）中華の先住民族」、または「台湾（あるいは）中国の南島（オーストロネシア）民族」などの名称の可能性を排除してしまっはならず、注意が必要である。本稿ではそのことを喚起した上で、「台湾先住民族」という言葉を暫時的に使用することにする。また、「平埔族」と自称する人々の中には、「原住民族」としての身分の公認を要求する運動を展開する人々がいる。人口は台湾（中華民国）において2004年現在、45万人強である。
- 8) 運動は、1994年に憲法において「原住民」を明記させ（1997年には「原住民族」とする）、1996年には中央政府レベルの行政機関、（行政院）原住民委員会（現原住民族委員会）を発足せしめた。近年の動向に関しては、笠原 [2004] を参照。
- 9) 例えば、次のような説明。「植民地主義を正当化するのは、植民者が被植民者より優れており、また、植民地支配はその近代化に必須の経済基盤・政治基盤を発展させることに繋がるので、被植民者にとって利益になるのだという考え方である」（ウィキペディア「植民地主義」）。
- 10) 総督府の残した資料において語るタイヤルの言説は、暴力のもとで黙らされてきた歴史において検証されるはずである。「黙らせる」（silencing）という点については、タウシグによる「常態としてのテロル：ヴァルター・ベンヤミンの受苦の状態（受苦の国家）としての歴史哲学」[Taussig 1992: 11-35] を参照。台湾高地における日本植民主義の暴力に関して、北村嘉恵 [2003a, b; 2004] や松田京子 [2005]、中村勝 [2003; 2005] が、実証的に検証を進めている。楊淑媛 [2003a, b] と石垣直 [2004] は、ブヌン民族の狩猟活動やアイデンティティ探し（^{シュンゲン} 尋根）の旅における、植民地統治の記憶の到来を、民族誌において描き出している。
- 11) 傅琪貽の、「原住民族基本法」が歴史創造の主体としての「課題」を先住民族に投げかけたとする記述や、「おおらかな」先住民族の「本来の民族文化」を一人一人が取りもどす努力をしなければ

ばならないといった記述〔傅琪貽 2006:288〕に関しては、本稿は別の立場を取っている。

- 12) 本法は、その名のとおり、先住民族の權益に関して明確で概括的な保障をする。「先住民族の土地権と自然資源権」(第20条)を認め、「先住民族の土地開発にあたっては、先住民族のコンセンサスと開発への参与」(第21条)を必要とするなどである。
- 13) 2005年6月には、靖国神社に、高砂義勇隊として亡くなった先住民族の祖霊の返還を求め来日した〔丸川 2005〕。大阪高裁での、日本国と小泉首相、靖国神社に損害賠償を求めた訴訟では原告団長を務めた。2005年9月の判決では、原告の控訴は棄却されたが、首相の参拝は違憲との判断が下された。2005年秋、北京中央民族大学に入学。
- 14) 読者は、接触領域における、接触領域の記憶の民族誌記述に触れることにより、タイヤルや日本などのからまりあった記憶に(意図せずして)向き合わざるを得なくなる。読者は第何番目かの登場人物として、接触領域の民族誌記述に、すでに織り込まれている〔富山 2000bを参照〕。

参考文献

- Keenan, Thomas 1997 *Fables of Responsibility: Aberrations and Predicaments in Ethics and Politics*. Stanford: Stanford University Press.
- Pratt, Mary Louise 1992 *Imperial Eyes: Travel Writing and Transculturation*. London and N. Y.: Routledge.
- Taussig, Michael 1992 *The Nervous System*. New York: Routledge.
- アンダーソン, B. 1987『想像の共同体——ナショナリズムの起源と流行』(白石隆・白石さや訳) リプロポート。
- 池田士郎 2004「元高砂義勇隊マヤウ・カッテの戦争の記憶」山本春樹, 黄智慧, パスヤ・ポイツォス, 下村作次郎編『台湾原住民族の現在』草風館, 175-185頁。
- 以撒克・阿復 2005『『台湾先住民, アイデンティティと自決運動』コメント原稿』(「台湾原住民族, 認同與自決運動」與談稿) 行政院原住民族委員會主催「先住民族正式名称」(原住民族正名) シンポジウム, 8月13-14日, 台北, 13頁。
- 石垣直 2004「内本鹿への旅——〈尋根〉の人類学にむけて」『台湾原住民研究』8:36-73。
- 2005「原住民族基本法」『台湾原住民研究』9:219-229。
- 猪口安喜編 1921〔1989〕『理蕃誌稿』第三編, 台北:台湾総督府警務局〔復刻版東京:青史社〕。
- 上野千鶴子 1998『ナショナリズムとジェンダー』青土社。
- 2005「脱アイデンティティの理論」上野千鶴子編『脱アイデンティティ』勁草書房, 1-41頁。
- 太田好信 2003『人類学と脱植民地化』岩波書店。
- 大橋秀夫 1996「フロイト ジークムント ②理論」福島章編『精神分析の知88』新書館, 125-132頁。
- 岡真理 2000『記憶/物語』岩波書店。
- 笠原政治 2004「台湾の民主化と先住民族」『文化人類学研究』5:31-48。
- 北村嘉恵 2003a「台湾植民地戦争下の先住民政策——撫墾署の設置と先住民の対応」『日本史研究』494:21-46。
- 2003b「台湾植民地戦争下における先住民『教化』策——1895-1900年代初頭宜蘭庁の事例を中心に」『北海道大学大学院教育学研究科紀要』90:25-42。
- 2004「蕃童教育所の教員が巡査であったこと——日本植民地下台湾の先住民教育の担い手に関する基礎的考察」『日本台湾学会報』6:107-130。
- 黄国超 2005「從認同到抵抗: 原住民菁英對中華民族主義的兩種態度」(アイデンティティから抵抗へ——原住民知識人の中華民族主義に対する二つの態度), 山海的文学世界: 台湾原住民族文学国際研討会(山と海の文学世界——台湾原住民族文学国際シンポジウム) 會議論文集, 115-144頁, 9月2-4日, 花蓮。
- 黄淑玲 2000「変調的“ngasal”: 婚姻, 家庭, 性行業與四個泰雅聚落婦女1960-1998」(変調中の

- “ngasa”——婚姻、家庭、性産業と四つのタイヤル集落の婦女1960-1998)『台湾社会学研究』4: 97-144。
- 近藤正己 1996『総力戦と台湾』刀水書房。
- サイード, E. W. 1998, 2001 [1993]『文化と帝国主義 1, 2』(大橋洋一訳) みすず書房。
- 徐京植・高橋哲哉 2000『断絶の世紀 証言の時代』岩波書店。
- 孫大川 2000『夾縫中の族群建構』(隙間の中でのエスニック・グループ形成) 台北: 聯合。
- 田中雅一 2002「主体からエージェントのコミュニティへ——日常の実践への視角」田辺繁治・松田素二編『日常の実践のエスノグラフィ——語り・コミュニティ・アイデンティティ』世界思想社, 337-360頁。
- チョウ, レイ 1999『プリミティヴへの情熱』(本橋哲也・吉原ゆかり共訳) 青土社。
- 鄭映惠 2003『〈民が代〉斉唱——アイデンティティ・国民国家・ジェンダー』岩波書店。
- 富山一郎 1996「対抗と廻行——フランツ・ファノンの叙述をめぐって」『思想』866: 91-113。
- 2000a「困難な『わたしたち』: ジュディス・バトラー『ジェンダー・トラブル』」『思想』918: 91-107。
- 2000b「テロルを思考すること——目取真俊『希望』」『インパクション』119: 84-5。
- 2002『暴力の予感——伊波普猷における危機の問題』岩波書店。
- 2005「沖縄戦『後』ということ」歴史学研究会・日本史研究会編『日本史講座10 戦後日本論』東京大学出版会, 291-324頁。
- 中村平 2003a「台湾高地・植民地侵略戦争をめぐる歴史の解釈——1910年のタイヤル族『ガオガン蕃討伐』は『仲良くする』(sblaq) なのか」『日本学報』22: 45-67。
- 2003b「マラホーから頭目へ——台湾タイヤル族エヘン社の日本植民地経験」『日本台湾学会報』5: 65-86。
- 2003c「雅基・比穂的故事(ヤキ・ピスイの物語)」(ヤキ・ピスイ口述, 中村平整理, 李英茂訳)『宜蘭文献雑誌』(中華民国宜蘭県立文化センター) 62: 67-154 (原文は中国語と日本語)。
- 2006「ロシン・ワタンをめぐる史料紹介」『台湾原住民研究』10: 213-233。
- 中村勝 2003『台湾高地先住民の歴史人類学——清朝・日帝初期統治政策の研究』緑蔭書房。
- 2004a「タイヤル神オットフの発見と反『文化接触変容』運動——『素人』キリスト者井上伊之助論」『名古屋学院大学論集(社会科学篇)』40(4): 174-202。
- 2004b「『他者』観念への渇きもしくは『九百人の妄想家』——『台湾出兵』および日清戦争後期にみる『賊徒』の討伐と『虐待』」『名古屋学院大学論集(社会科学篇)』41(2): 103-152。
- 2005「植民統治と『科学以前的生活世界』の思想史的考察——台湾『教化植民地主義』における『理蕃』を中心に」『名古屋学院大学論集(社会科学篇)』41(4): 210-238。
- バトラー, ジュディス 1999『ジェンダー・トラブル——フェミニズムとアイデンティティの攪乱』(竹村和子訳) 青土社。
- 傅琪貽 2006「台湾原住民族における植民地化と脱植民地化」倉沢愛子, 杉原達, 成田龍一, テッサ・モーリス・スズキ, 油井大三郎, 吉田裕編『岩波講座アジア・太平洋戦争 4 帝国の戦争経験』岩波書店, 267-291頁。
- 黒帯・巴彦 2002『泰雅人的生活形態探源: 一個泰雅人の現身說法』(タイヤル人の生活形態の源流研究——カミングアウトした一人のタイヤル人による語り) 新竹: 新竹県文化局。
- 松田京子 2005「1930年代の台湾原住民をめぐる統治実践と表象戦略——『原始芸術』という言説の展開」『日本史研究』510: 152-180。
- 丸川哲史 2000「脱植民地化/脱アメリカ化——日/台ポストコロニアル言説を読む」『現代思想』28(11): 8-23。
- 2005「靖国神社で歌われなかった歌は——台湾原住民訪日団『返せ! 我が祖霊』行動の一日」『現代思想』33(9): 76-81。
- 悠蘭・多文 2004『泰雅織影』(タイヤル織影) 台北: 稻郷。
- 楊淑媛 2003a「過去如何被記憶與経験: 以霧鹿布農人為例的研究」(過去はいかに記憶され, 経験さ

- れるか——霧鹿のブスン人を例とした一研究)『台湾人類学刊』1(2):83-114。
- 2003b「歴史と記憶の間：従大関山事件談起」(歴史と記憶の間——大関山事件から語る)『台大文史哲学報』59:31-64。
- 利格拉樂・阿媽^{リカラッアウー} 1998『穆莉淡 Mulidan：部落手札』(ムリダン——集落親書)台北：女書文化事業。
- 麗依京・尤瑪^{レギンユマ} 1996『傳承：走出控訴』(伝承——立ち上がり告発する)台北：原住民族史料研究社。
- 麗依京・尤瑪編 1999『回歸歴史真相——台湾原住民族 百年口述歴史』(歴史の真相への回歸——台湾先住民族百年のオーラルヒストリー)台北：原住民族史料研究社。
- 鷺田清一 1999『「聴く」ことの力——臨床哲学試論』TBS ブリタニカ。
- 瓦歷斯・諾幹^{ワリスノカン} 1998「台湾原住民文学的去殖民——台湾原住民文学與社会的初歩觀察」(台湾原住民文学の脱植民：台湾原住民文学と社会の初歩的觀察)台湾原住民文教基金会編『21世紀台湾原住民文学』台北：同基金会, 36-51頁。